

### 米国帰りの悲劇の俊才

旧佐土原藩主の子で、佐土原に生まれた。三歳で寺社奉行町田宗七郎の養子となったが、一八七三(明治六)年の留学中、修学資格の変更で元の島津に戻った。十歳になると鹿児島に遊学、翌年には東京の勝海舟の塾に入つて、世界へ眼を開くきっかけを与えられた。一八七〇(同三)年、海舟のすすめもあつて、藩費留学生として十二歳の若さで米国に渡つた。滞米生活七カ年、その間アナポリス、ニューハーベン、グリンブルドで英仏語を中心に文学、数学を学んだ。

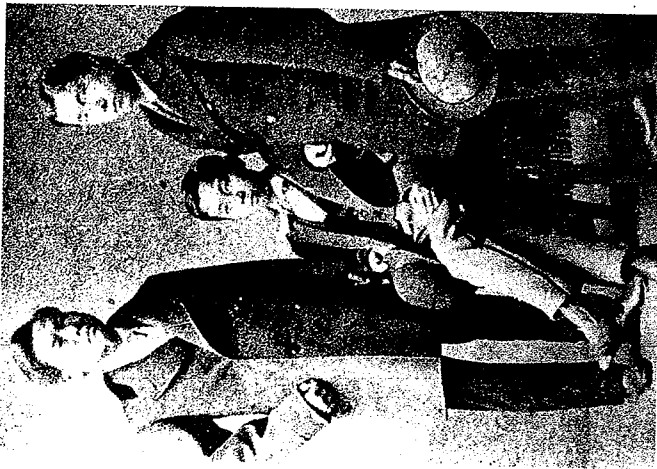
帰国から数日後、東北地方の旅に出て、戊辰戦争の旧佐土原藩戦没者の墓に参り霊を吊つている。その後、華族会館から華族子弟の教育意見を求められるが、教育の自由平等とはほど遠い学校(学習院)の設立計画に反対し決別した。望郷の思いを抑えきれず、海舟に書いてもらった西郷隆盛あての紹介状を懐に故郷の広瀬に帰

つた。すぐに同志とはかり、遊惰にながれる青年の教育事業に取り組んだ。そこではアメリカで学んだ自由民主の思想が新鮮な知識として伝えられた。

三カ月後、西商戦争が起こると、有司専制(藩閥のエリートが独断的に政治を行うこと)からの解放をめざし、父や兄の説得をも押し切り「吾人の為さんと欲する所を為すのみ」として佐土原の同志二百余人とともに参戦した。西郷は若く有為な人材ゆえに参軍を断つたが、島津啓次郎のひきいる佐土原隊は熊本各地を転戦した。

途中、単身上京して事態收拾の計画をたてたが成功せず、再度本隊と合流して可愛岳、三田井、椎葉、米良、小林を経て一八七七(同十)年九月二十四日、西郷らとともに鹿児島山の城山で二十一歳の生涯を終えた。

(徳永 孝二)



米国のニューハーベンで兄らと一緒に写す(中央が啓次郎、右は兄の大村純雄、左は日高次郎)



島津 啓次郎

#### ◎私学をおこす

広瀬に帰つた啓次郎は、新知識伝授の教育事業に意欲をもつた。そこで五十人の同志とともに閑静な三瀬山中に入り廃寺(谷照寺・国昌寺)を借り、「自立舎」と名づけた学習会をはじめた。舎長には島津啓次郎が推され、運営はアメリカ仕込みの全員でできる民主的な方法で、啓次郎も牧事、湯沸かしなどを喜んで引き受けた。

寝起きをともにするなかで読書・講演・討論等を通じ学習が深まったという。それから三カ月後、同志の奔走で広瀬天神山に「島文塾」という私学校が誕生した。啓次郎は豪放な性格で物事に動ぜず、上下の別け隔てなく接する情の厚い人であった。

6

小倉 処平

一八四六(弘化三)年ー一八七七(明治十)年

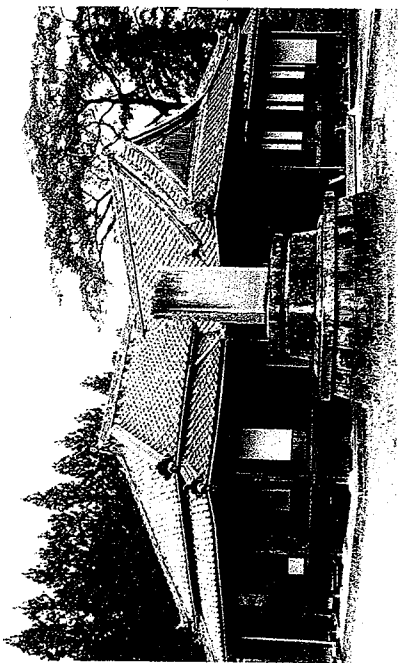
「貢進生制度」を実現

飢肥(現日南市)の生まれ、中級藩士長倉喜太郎の二男。十八歳のとき同藩士小倉九十九(つづら)の養子となった。一八六四(元治元)年に藩命で京都に行つて藩の外交に当たり、後、藩校振徳堂の句読師(読み書きを教える人)・寮舎長にも選ばれた。処平の指導理念は世界雄飛を目指す進歩的なもので、生徒から尊敬を集めていた。間もなく江戸に出て、安井息軒の門人となり、陸奥宗光・谷干城らと交流があつた。

明治に入ると、公費による長崎留学制度を藩主に進言し、一八六九(明治二)年には小村寿太郎、伊東益夫、田原億蔵を、自ら引率して長崎に留学させた。当時、大学南校(東京大学の前身)は、雄藩出身者で占められていたので、小藩からも学生を出す「貢進生制度」を同志とともに進め、実現させた。小村寿太郎も入学できて、後に大成する契機を得た。処平はこのころ文部権大丞の職についていた。

一八七一(明治四)年に海外留学を命ぜられ、英国、フランスで政治や経済を学んだが、国内で征韓論決裂のこゝろを知り急いで帰国、西郷隆盛・板垣退助らが下野すると、彼もまた飢肥に帰郷した。一八七四(同七)年佐賀の乱が勃発し、敗れた首領江藤新平らがひそかに処平を頼つて飢肥に潜入してきたのを、外ノ浦港から土佐へ逃亡させた。そのために彼は禁錮刑に服し、後、大蔵省七等出仕となつた。

西南戦争が起こると、「日向の人心を鎮ぶしてくる」と唱えて帰郷したが、すでに飢肥土族三百名が前線にあることに義を感じ、薩軍奇兵隊総監として転戦、和田越(現延岡市)の戦いで負傷し従容として自刃した。『英国租税年表』などの訳述を残している。(藤井 美智雄)



小倉処平が、少年期に学び、青年期に進取的な指導をした、旧飢肥藩校「振徳堂」



ロンドン留学中の小倉処平

● 処平 ●

◎ 家族愛と教育一家

処平は孝養心の深い人物であつたことが、留学先の英国から家族宛の手紙に表されている。「英国運動府自一筆啓上仕候」に始まる文面には、両親兄弟への安否伺いから、「養生第一にして何卒ご無理なきように」と美文で綴られている。遠く異郷の地にある身を案じてくれる家族へ、無事を伝え、愛情にあふれた心遣いで満たされている。

処平自身が藩費留学の促進や小村寿太郎育ての恩師であるなど教育への熱意はもちろんであるが、兄の長倉初も安政年間に振徳堂の助教を務め、県官を歴任。西南戦争では飢肥隊編成の先駆けとして活躍し、戦後では三年の刑期を送つた後、農商務省の御用掛に仕任している。弟の長倉雄平はまれにみる努力家で、文部省督学局に勤務の後、学校教師に転じて、新潟・山梨など各県の師範学校長を経て、一九〇六(明治三十九)年退職後は帰郷して後進の指導に務めた。兄弟共に教育者であつた。